大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ベーメの生涯と思想（二）：処女作以降

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福島, 正彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006478

ベーメの生涯と思想 (二)

――処女作以降――

福島正彦

ヤコブ・ベーメの処女作『黎明』が一六一二年に世に現われ、これがゲルリッツ教会の首席牧師グレゴリウス・リヒターの目にとまって異端と決めつけられたことは、すでに前稿で述べた。ここにベーメの受難の半生が始まるのであるが、本稿ではその足跡をたどりながら、前稿と同様ベーメの思想における内面的神秘主義の断面に照明を当て[1]、彼が迫害と貧困に苦しんだ生活の中で、五十才で死ぬ年まで[2]、自己の思想の貫徹と表現のために生き抜いた姿を描きたいと思う。

――処女作没収され、執筆を禁じられる――

ヴィースナーの報告によると、一六一三年六月二一日の日曜日に、首席牧師は説教壇でベーメを名指しで非難し、このまま放置すれば町全体が破滅すると人々を脅かして、「叛逆者、騒々しい浅薄な男にして異端者」であるベーメに対し、役所はただちに報復の剣を執るべきだと警告した。そして、この説教のあとで教会中庭にベーメの姿を見つけた彼は、憎悪に充ちた目でにらみつけ、「悪魔よ、私の許から立ち去れ！ 焦慮を抱いて地獄へ行け！」と呪いの言葉をあびせた。これだけでなく更に、ベーメを捕えて塔の中に閉じこめようとまでしたが、他の牧師が押しとどめたために、やっと帰宅を許したというのである。[3]

このヴィースナーの報告は実証的な資料上の裏づけを欠いているので、右の日にこの通りの出来事が実際に起こったのかどうか、確証することができない。資料の明示がない限り、無批判にこの話の全てを事実として採用することは、我々には到底できない。この報告も、伝記的叙述によく見うけるように、ベーメに好意を寄せた人間が、部分的に現存した出来事に立脚して虚構した単なるエピソードにすぎぬかも知れない。ただし、リヒターが説教壇でベーメを刺のある言葉で非難し、役所に告発をおこなったことについては、その日付がヴィースナーの報告通りでないとしても、事実であったと認めることができる。

我々は明確に記録に残っている出来事を取りあげなければならないが、首席牧師からベーメに対する異議を受けとったゲルリッツ市長は、一六一三年七月二六日に参事会を開き、ベーメを呼び出して尋問をおこなった。市長バルトロモイス・スクルテートスの遺した日記録に、次のように記載されている。「一六一三年七月二六日、養老院の鍛冶場の裏手の塔の間に居住する靴屋ヤコブ・ベーメは、罰のために市庁へ召喚され、その熱狂的な信仰について尋問され、オズワルト〔とい

う役人〉がベーメの家から四つ折判の彼の書きものを持ってきたのち、ただちに牢獄から解放され、今後このようなことは止めるようにと諫められた。[4]」

この時のことについてベーメ自身が一六二〇年の書簡で触れ、処女作『黎明』は「私から力ずくで奪いとられた」と記し、[5]その後の別の書簡では、それを「もはや三年間、見ることがなかった」と述べている。[6]ただし、彼が再び見ることができた処女作は、その筆写本にすぎなかった。「これまですでに四回、私の目に触れた」と一六二〇年に記しているが、それが原本の方でなかったことは、彼自身が断わっている。[7]いったんベーメの手から奪い去られた自筆原稿は、二七年間市で保管され、ベーメの死後十七年を経た一六四一年十一月二六日、時の市長パウル・スキピオによって持ち出され、数人の手を経たのち、オランダ、アムステルダムの商人バイエルラントの手元に渡って、やっと日の目を見たのである。[8]

処女作が役所に没収された二日後、七月二八日の日曜日に、首席牧師がベーメ非難の雷雨を落とした。[9]リヒターは壇上から攻撃しただけでなく、更に彼を自分の許に呼びつけて、今後ペンを執ることをあらたに禁じた。ベーメ自身がこの日のことについて一六二四年四月三日に次のように記している。「私は牧師団の前で、彼に対して釈明し、私の根拠を示した時、私は首席牧師によって、今後はもはや執筆しないようにと命じられた。私はそのことに同意したが、しかし当時はまだ神の示す道を、神が私に何をなそうとしているかを、理解できていなかった。一方、首席牧師の方も、他の牧師たちと共に、今後は説教壇での非難は止めると約束した。[10]」

――恵まれた靴匠から貧しい糸商、手袋商に転落する――

著述を禁じる命令に素直に従うことを約束した当時のベーメは、自分が無学な一介の市民にすぎず、「弱い乏しい学問と鈍い舌」[11]しか持たないことを十分に自覚していた。前稿で述べたように、彼は十四才で靴屋へ徒弟奉公に出ており、したがって、彼の受けた正規の学校教育は、聖書に基づくごく初等程度の域を越えないものであった。この個人的制約を映して、『黎明』は、その内容の豊かさにもかかわらず、表現様式はきわめて稚拙で奇怪とさえいえるものであった。ベーメはのちに、エックハルトやタウラーの文章と比肩しうるほどに「感銘的な美しい表現」に充ちていると評される小文集を著わしたが、[12]処女作に関する限り「厄介などもりがちの言葉」に溢れているといわざるをえない。実際、ベーメの諸著作ほど表現が冗長で混乱し、畸形でまとまりのないものは他にないという点で、「誰もが一致する」といわれるが、[13]ベーメ全集に含まれる数冊にでも目を通した人なら、この意見に反対することはできないであろう。

エルンスト・ベンツによれば、フィヒテがベーメを「空想家 Schwärmer」あるいは「錯乱せる夢想家 verworrener Träumer」として却けたということであるが、[14]少なくとも表現様式の荒唐無稽に矢を当てていえば、このような酷評が下されるのも全く故なしとしない。この幼稚な敍述方法の中に蔵されているベーメ独自の思想を理解することは、あたかも「高価な真珠を」塩からい濁流の中に「実に奇怪なもの不快なものの間に」探り当てるようなものであると、著名な哲学史は巧みな比喩を使って評している。[15]ベーメの思想の「深さと内面性」を認めたヘーゲルも、この表現様式の稚拙さ、野蛮さに辟易し、「我々は彼を恥じる必要はない」とわざわざ断わらなければならなかったほどである。[16]

このような稚拙な表現形式しか知らなかったのであるが、処女作となったメモの記述に心魂を傾けたベーメは、靴業を全く放棄してしま

っていた。一六二二年の書簡で、当時を振りかえって、次のように記している。「神と兄弟たちにこの新しい召命で仕えるために、そして、たとえバベルとアンチ・クリストによって割りに合わぬ仕打ちを受けようとも、私の報酬を天において受けとるために、私の手工業の仕事も放置してしまった。[17]」そして、ついに一六一三年三月十二日には、ゲオルク・ジュセンバッヘンなる人物に四七〇マルクで製靴用仕事台を売却してしまっている。この製靴用仕事台は、一五九九年に二四〇マルクで購入したものであったから、それ以来ほぼ二倍に値上りしたことになる。イェヒトは、ベーメが靴業を営んでいた限り、経済的に悪い状態ではなかったことの証拠の一つとして、右の事実を挙げている(Jecht, S. 197)。

役所と教会の両者より執筆禁止をいいわたされる数カ月以前に、ベーメは著述に専念できる、より有利な条件を求めて、経済的に恵まれた靴業を放棄し、転業を図っていたのである。「ヤコブ・ベーメは同時に妻と共に商売を始めた。最初は糸の商いであった。」更に「木綿の手袋」の売買に従事し、「年に一度プラハへこの商品を携えて旅をした」(Jecht, S. 197f.)。しかし、ベーメの企ては見事に失敗した。凶作、饑饉、貨幣価値の低下、ペストの流行などのために、この新しい商いは不振をきわめたのである。当時ゲルリッツでは、糸の販売は公けの市場でおこなうことになっていたが、一六一六年十月八日付の役所記録によれば、ベーメの妻が、十七人の他の婦人たちと共に、この禁令を破って行商し、告訴されたこと、十四日後にはベーメ自身が同罪で罰せられ、十日以内に十ターレルの罰金を支払うように命じられている(Jecht, S. 196)。このように糸商として記録に登場するベーメ夫婦は、貧しい行商人におちた哀れな姿である。

――六年間の沈黙――

貧しい糸商、手袋商のベーメは執筆の禁令を受けて、「六年間身を屈し、一言も書かなかった[18]」(ベーメのこの沈黙の期間について、フランケンベルクは「七年間」だと記しているが、[19]ベーメ自身は首席牧師への弁明書で右のように述べ、一六一九年一月十八日付のカルル・フォン・エンダー宛書簡で、『神的存在の三原理』の「始まりが大いになされた」と伝えているので、[20]我々もグルンスキーに従って、再執筆の時期は一六一八年にさかのぼれると考えたい。[21])

謙虚で素直な性格のベーメは、「今後は説教壇での非難は止める」と約束した首席牧師の言葉に期待を寄せたし、また博学の牧師にその学問的知識において対抗しようとは夢想だにしなかった。「筆者は理解力の足らない無学者であったし、加えて経験を積んだ学者と較べれば、秘事に関してほとんど子供ぽいようなものであった[22]」と後の書簡で自分自身を語っている。彼は周囲の知己からパラケルススの錬金術の知識を断片的に得ることができたであろうし、また彼の方から「パラケルススの様々の言葉の説明[23]」を友人たちにおこなうこともできたが、しかし自らその体系的専門家になろうとしたこともなければ、専門家であると自認したことも一度もなかった。まして宇宙を科学的、実証的に探究し始めた当時の新しい学問分野に関しては、全く無知に等しいことを卒直に認めた。「私の企てはあらゆる星の経過、場所、名称を記述しようとするのでもなく、星が年々その交会、衝、矩象などをいかにして持つかということを記述しようとするのでもない。そういうことは長年月を通じて、高い学識のある賢明な人々により、勤勉な観察と注意深い理解と計算とによって経験されてきた。私はそのようなことを研究したことはないし、そういう研究は学者に任せよう。私の企ては精神と意味とに従って記述することであって、観察に従っ

てではない。[24]」「私は彼らの方式を変更したり改善したりする意志はない。私はそんなことはできないし、それらを決して学んだこともない[25]ので、私はそれらをそのまま置いておくのである。」「私は愚直な男であって、高度の技術や研究には無経験であるけれども、また高度の熟練の練習をしたり大神秘を私の理性において把えたりすることが、私の課題でも決してなかった。[26]」このように実に卒直に語っている。

ところが、こうしてベーメが従順にも堅く口を閉じていた間、リヒターの悪舌は、ベーメの異端性に対する毒々しい罵言の声をのせて、とどまることがなかった。説教壇での非難は止めるという約束で、ベーメに執筆を禁じた首席牧師の方が、自ら協定を破っていたのであった。その時の苦痛をベーメは次のように述懐している。「彼はその間ずっと私をひどく誹謗し、私に全く何の責任もない事柄を私になすりつけ、町中を惑わせて私の悪口をいわせた。そのために私は妻子と共に町の人々の間でまるで見せ物であり、愚かな笑われ者とならねばならなかった。私はこのような神的な事柄の高貴な認識について書いたり語ったりすることを、牧師の禁令に従って、多年のあいだ控え、いつかはこのような誹謗も止むだろうと望んでいた。ところが私の望んでいたことは起こらず、益々ひどくなるばかりであった。[27]」

すでに『黎明』の中でベーメは、自分がこのような誹謗、迫害にあうことを予感して、次のように記している。「私は全く十分に知っている、肉の子らが私を嘲笑し、私が自分の本分を尽し、これらの事柄に頭をわずらわせないで、むしろ私と家族の腹をふくらませるものをもっと熱心に得るようにし、哲学することはそれを学んだ人々に、それを本職とする人々に任せるべきだ、と語るだろうことを。[28]」実際、ベーメは自分だけでなく妻子さえ人々の見せ物、笑われ者となった時、しばしば「哲学すること」を放棄し、ひたすら生業のみに専念しようという誘惑にとらえられた。当時を回顧した書簡は、そのことを告げている。[29]「迫害のあとでは私はもはや何もしないで、神に従順な者として静かにしていようとした。そして私に対する嘲笑を悪魔が騒々しくあびせるに任せようとした。」「私がどんなに苦しんだか、口でうまくいい表わすことができない。」「私の外なる人間はもはや書きつけることを欲しなかった。」しかし、この誘惑に身をゆだねて哲学することを止めようとすれば、その時ただちに彼の魂は不安となるのであった。

ベーメは外的迫害と執筆への内的衝動との間で苦悶した。「私の中には不安以外の何ものもなかった。外からは嘲笑が、内からは火の如き衝動があった。[30]」そして、ついに内的衝動に従わざるをえなかった彼が、六年間の沈黙を破って再びペンを執り、陸続と著述を発表し始めた時、我々は彼を約束破棄の違法者として弾劾すべきであろうか。彼はもはや書くことを抑えることができなくなったのである。一六一八年になって記述を始め、翌年に完結した『神的存在の三原理』の中で、彼は「私はこれを書きつけることを止めることができない[31]」と記している。

――再びペンを執ってからの暮し――

こうして再び執筆を始めてからは、もはや何ものもベーメのペンを制止できるものはなかった。今や彼にとっては、書くことが同時に思考することであった。「ベーメは表現することなしには思考することができないのであり、書くことによる以外に表現することができないのである[32]」といわれるが、この頃のベーメの執筆の生活を想うと、我々はこの言葉に、正にその通りだとうなずかざるをえない。彼の尨大な著作は書簡を含めて、シーブラー版で七巻、ポイケルトの復刊版で

十一冊中に収められているが、処女作を除いて、この大部の著作、弁明書、書簡が一六一八年に始まるベーメの最後の六年間に書かれたのである。彼の思考とペンの動きは、あたかも堰を切って一挙にあふれ出た流水のように急激であった。ベーメ自身は、愛用の「にわか雨」の比喩によって、これを表現している。「燃える炎がしばしば余りに遠く駆り立てるので、手とペンを急がさねばならない。なぜなら、それはにわか雨のように通って行くからである。」[33]

後にシェリングによって注目された、ベーメの存在論の根本概念というべき「無底」Ungrund の語も、すでに指摘した人があるように、[34] ベーメのこの最後の六年間の初期一六二〇年に、「Von der Menschenwerdung Jesu Christi」の中で始めて使用された。そこでは、例えば次のように述べられている。「そこから光が生まれでる火の固有性に関していえば、我々は生命、運動、精神の原因である火の固有性を自然として認識するのである。さもなくば、いかなる精神も、光も、存在者もないであろう、かえって永遠の静寂のみがあり、色も徳もなく、存在者なき無底があるのみであろう。[35]」「自然の外なる無底としての永遠性の中には、存在者なき静寂以外のなにものもない。それは何ものかを与えるいかなるものも持たない。それは永遠の休息であって、等しきものもなく、始めも終りもなき無底である。また目標も場所もなく、欲も見もなく、そこに可能性があるような何ものもない。[36]」(「無底」は、このように「存在者なき静寂」として説かれるだけでなく、[37]「充実」として、あるいは「何ものかへの欲求」として、[38]解される契機をも持っている。例えば他所では、次のように説かれる。[39]「第一原理は不可思議な苦悩の内にあり、その中心は存在者なしに存立しえぬ炎である。このゆえに存在者への飢えと欲求が存するのである。」「そこにおいて永遠の言葉が生れる無底の中心のなかの無底の意志は欲求的である。」「無底においては何の顕示もなく、永遠の無であり、存在者も色も徳もなき静寂である。しかしこの欲求の中に色、力、徳が生じるのである。」――このようにベーメの「無底」は二重的性格を持っているが、これについては、かつて論じたことがあるので、[40]ここでは詳しく再論しない。)

五十才で生涯を閉じたベーメのこの最後の六年間は、賦与された「高貴な真珠の火花」[41]を著作によって輝かすべき活躍期であったと同時に、物質的な暮しの面では落ちぶれたみじめな晩年であった。この間に彼は身近に三十年戦争の荒廃を体験した。一六二〇年九月九日から六カ月半にわたって、イェーゲルンドルフ伯の繰り出した軍隊によって町が侵攻された際、ベーメは兵士からの感染で「六週間」病いの床にふした。[42]また、彼の住居はゲルリッツの町に流れるナイセ川のほとりにあったが、戦火はこの川にかかるナイセ橋を襲い、またたく間に橋を倒壊させた。その光景を目撃した時(一六二二年七月十八日)の衝撃を、彼は次のように記している。「橋の真中の橋桁全体が上から土台まで倒壊してしまったために、我々は今や町(ゲルリッツ)へ行くことができない。この倒壊は、まるで銃を射るかのように一瞬にして起こったのであり、それを私は自分が橋の上に立っていたので、自分の目で見たのである。……私が見たこのようなことは私をひどく驚愕させた。私は橋の壊れた所から三エルレを超えないところにいた……そこから驚いて走り去り、ただちらっと見ただけであったが、振り返って見る間もなく全てが一瞬の内に崩壊していた。[43]」こういう混乱のさなかに、もはや靴業を放棄し、魅せられたように著作に専念していたベーメであったが、その著述に対する報酬はほとんど与えられなかった。生前ベーメの著わしたものは、唯一の例外(『キリストへの道』)を除いて、全て手稿であったからである。もっとも、手稿の筆写を許された謝礼として「五ターレル提供した」人もいたが、[44]このように現金で報酬を受けることはまれであった。

ベーメの暮しの貧窮ぶりを知った貴族エンダーが援助を申し出たが、ベーメは最初「私には時間的に善いものや贈り物は何ら重要ではありません」と、自己の衿持を示しながら、丁重な断わりの手紙を出している。[45] しかし、新しく始めた糸商、手袋商が不首尾に終わったベーメは、結局、彼の理解者たちの個人的援助を受けて生計を立て、家族を養う他はなかった。彼はエンダーから送られた穀物を感謝の念に充ちて受け取ったことを、一六一九年十二月の手紙で告げている（Theos. Sendbr. Schiebler Bd. Ⅶ, S. 379）。この貴族は一六二〇年五月にも、哀れなベーメ家に穀物を送っている（op. cit. S. 382）。一六二一年十月には、ベーメは別の知人の貴族に三つの空袋を送り、食料品をつめて返送してくれるよう頼んでいる（op. cit. S. 434）。一六二二年十一月には、空袋二つ分で同じことを依頼している（op. cit. S. 468）。この年の夏の手紙は、魚を送ってくれる援助者もいたことを示している（op. cit. S. 568）。シーブラー版には見当らないが、ポイケルトによる復刊版に収録されているエンダー宛の書簡 Nr. 73 には、次のようなみじめな懇願の言葉が記されている。「販売用のチーズをまだ持っておられるのでしたら、三包みほど、またはあるだけで結構ですから分けて下さるように妻が乞うています。また一袋のかぶらを分けて下さるならば、私には有難いのですが。[46]」

――『キリストへの道』の出版と内面的神秘説の成熟――

貧しい暮しではあったが、著作がまだ手稿と筆写だけで人々に読まれていた間は、ベーメ一家の生活はそれでも穏やかな方であった。しかし、著述の一部が印刷に付されて出版された時、事態は急変した。一六二三年の暮、理解者の一人、貴族ハンス・ジーギスムント・フォン・シュヴァイニヘンが「真の懺悔について」「真の平静について」「超感性的な生について」という三つの小冊子をまとめ、『キリストへの道』というタイトルを付して、著者の了解のもとに、出版の計画を立てた。これがゲルリッツの印刷業者ラムバウの手で印刷されて、町に現われたのである。〔その時期については、ベーメが一六二四年四月二十日付の手紙で「数週間前に始めて印刷されるよう促がされた」（Theos. Sendbr. Schiebler Bd. Ⅶ, S. 541）と記しているところから、ほぼ推察される。〕この出版物が首席牧師リヒターの手に渡らぬ筈はなかった。彼は、ベーメが沈黙の禁令を破っただけでなく、その著述が印刷されて公然と世に現われたことを知り、烈火のごとく怒り狂った。

『キリストへの道』がベーメの成熟した内面的神秘思想の最も鮮やかな、最も力強い表現であることに、異論を唱える者はいない。むしろ、この小著に関しては、卒直な賞賛の言葉を惜まず、深い愛著を示す人々があとを絶たないのである。例えば Koyré も、ここでベーメの説いていることは、ドイツ神秘主義の古典的教説にほかならず、[47]「彼の言葉の美しさ、力、荘重さに打たれるには、真摯さと真実さの模倣し難い調子によって感動させられるには、『キリストへの道』を形成する小文のいずれか一つを繙くだけで十分である。[48]」という。また、ドイツ神秘主義の教えが、このように美しい言葉で表現されていたので、『キリストへの道』をヨハネス・タウラーの書であると信じて、そのことを自著に記した者が実際にいたほどだという。[49] タウラーとベーメとの親近性については、すでにフランケンベルクが両者の次の言葉を挙げ指摘していたが、[50]――「その人にとって悩みが喜びであり、喜びが悩みである者は、このような等しさに対して神に感謝する」（タウラー）、「その人にとって時が永遠のようであり、永遠が時のようである者は、一切の争いから解放されている」（ベーメ）――新しくはグルンスキーも「超感性的な生について」の一篇が「タウラーの文体

との著しい接近を示している」と指摘している。[51]

ベーメはこの書において、自己の内面的神秘思想をつきつめ、魂の内奥において神性に到る「過程」Prozeß をきわめようとする。「この小冊子の中で、私がそれによって神から私の賦物を得たところの私自身の過程が記されている。[52]」ここで「私自身の過程」とベーメが名付けるものは何であったか。それは「我性」の放棄であり、「心の転換」であった。彼は「我性」の否定を念じて、「おんみの死において私という死を死なしめよ」(Der Weg zu Christo, Schiebler Bd. I, S. 7)、「おんみの死によって、私の我性を殺せ」(op. cit. S. 8) とキリストに向って語る。彼によれば、キリストはあくまで「我々全ての内なるキリスト」(op. cit. S. 39) であり、万人に内在して、その「死」において「私という死」を無化する働きである。「私という死」は我々のエゴ、残虐性と罪性に纏綿せられた我性であり、我性の否定は同時にそれを焦点として意味連関を持つこの闘争の世を捨てることである。「神の意志の熟慮と探究は全て心の転換がなければ空しいことである」(op. cit. S. 90)。「神性」に到るには、先ず我意が自らを「無の中へ沈めなければならない」(op. cit. S. 83)。こういうベーメの「過程」は、「超感性的な生について」と題される小篇の中で、「師と弟子との対話」五七問答の形で詳細に力強く表現されているので、最初の部分をそのまま訳出しておこう。

弟子は師に問うた——いかにして私は超感性的な生に到り、神を見、その語るを聞くことができるでしょうか。

師は答えた——あなたが被造物の住まぬ所へ一瞬、跳入しうるならば、あなたは神の語ることを聞くであろう。

弟子——その所は近いのでしょうか、それとも遠いのでしょうか。

師——それはあなたの内にある。あなたのあらゆる欲と思慮とについて、一瞬、沈黙しうるならば、あなたは神の語らざる言葉を聞くであろう。

弟子——思慮と欲を黙せしめる時、私はいかにして聞きうるのでしょうか。

師——あなたの我性の思慮と欲を黙せしめるならば、あなたの内に永遠の聞、見、言が顕示され、これらのものがあなたを通して神の言葉を聞き、神を見るであろう。あなた自身の聞、欲、見があなたを妨げるために、あなたは神を見ず、神の語るを聞きえないのである。

弟子——神が自然と被造物を超越しているのならば、私は何によって神の語るを聞き、神を見るというのでしょうか。

師——あなたが静かに沈黙する時、あなたは、神があなたの自然と被造物をそこから造られた当のものである。かくしてあなた自身の欲、見、聞が始まる前に、神があなたの内にあって見かつ聞く当のものにより、あなたは聞き、かつ見るのである。

弟子——いったい何が私を妨げて、私をそのものの許へ行かせないのでしょうか。

師——あなた自身の欲、聞、見である。そのためにあなたは自分の根源に反抗している。あなた自身の欲でもってあなたは自分を神の意志から切り離し、あなた自身の見でもってひたすら自分の欲を見入っているにすぎない。そしてあなたの欲は、聴力を地上的な自然的な諸物の固有の感性によって閉塞し、自分を一つの根底の中へ導き入れ、あなたが欲するものでもって自分を隠している。その結果あなたは超自然なもの、超感性的なものに到りえないのである。

弟子——私は自然の中にいるのに、いかにして私は自然を破壊せずに自然を通過し、超感性的な根底に到りうるのでしょうか。

師——それには三つのことが必要である。第一にあなたの意志を神に委ね、自分を根底へ、神の慈愛の中へ沈めしめること。第二に

あなた自身の意志を憎み、あなたの意志があなたを駆りたてることをなさぬこと。第三に自分を十字架に懸け、自然と被造物との試練に耐えるようになること。これらのことをなすならば、神があなたに話しかけ、あなたの放下せる意志を自らの内に、超自然的な根底の内に導き入れるであろう。そしてあなたは、主があなたの内に語ることを聞くであろう。(Vom übersinnlichen Leben, in : Der Weg zu Christo, op. cit. S. 130f.)

五七問答中のこの冒頭の六問答の中にも、魂の内なる神性に到るためのベーメの「過程」は明らかに示されていると思う。これに続く第七問答において、弟子が「自己を十字架に懸ける」ことの必要を力説した師に対して、「もしそれをなすならば、私は世と自己の生命を捨てねばならぬだろう」(op. cit. S. 131) と嘆くが、これに答える師の教えは非情なまでに厳格で一徹である。我性の放下によってのみ、人は「何ものも自己の受容性において所有せず、したがって全てのものに対して無である」(op. cit. S. 132) という。そしてこの「無なる所」においてのみ魂は「神性」と出会い、これと合一するのである。魂はそこで「神よりも大きい愛」(op. cit. S. 137) に包まれ、忘我の歓喜を享受するというのである。

――迫害を受けて故郷を去る――

ゲルリッツの異端審問官と自任したグレゴリウス・リヒターは、『キリストへの道』の出版を彼への公然たる挑戦と受け取った。彼の説教壇での非難は一層、激烈となった。彼の口からは、ベーメを指して、ならず者、偽誓者、堕落せる酔漢、糞だらけの悪魔という聞くにたえない汚い言葉さえ発せられた。ベーメは一六二四年四月六日付のジーギスムント宛書簡で、その誹謗の激しさを形容して、「あたかもこの書が首席牧師の息子を殺害したかのように」彼は激昂したと伝えている (Theos. Sendbr. op. cit. S. 537)。リヒターの非難の内、三月七日、二六日、二七日のものは、のちに印刷されて町中に拡められた。三月二三日にはゲルリッツの臨時参事会が、二六日には定例参事会が開かれた (Jecht, S. 215)。参事会はベーメを再び召喚して尋問したが、「町から立ち去るべきだというような命令を下したのではなく、たゞ警告しただけであった」(Theos. Sendbr. op. cit. S. 539)。しかし、この警告を受けたベーメを待っていたものは、リヒターの誹謗文に煽動された群集を中心とする暴力ずくの迫害であった。ベーメはジーギスムントに書き送っている。「そこで私が役所から家に帰った。その際、役所の外側の部屋のドアの前に、首席牧師の徒党である数人のとげとげしい嘲笑者――恐らく牧師から送られてきたのだろう――が立っていて、私をののしった。その内の一人は不良の小僧であったが、頭の先から足の先まで私の衣服をもぎ取った。」(ibid.)。

警告に従って一人故郷を去るベーメに対して、リヒターは更に冷酷な呪いの言葉をあびせるのを忘れなかった。「速やかに立ち去れ、遠くへ行け、汝、浅薄にして冒涜の口よ、そして汝みじめな男よ、いかばかりの悲惨が汝を待ちもうけているかを思い知れ！」[53] このような口汚い呪詛に対して、ベーメは自己弁明書を著わさざるをえなかった。四月十日に書き終えられたリヒターへの弁明書は、グルンスキーによって、「激昂でふるえていてさえ熟慮する性質は保持され、イロニーの音を全てかなでながら、しかも常に事柄に即して深い厳粛さを失わない」[54] と評価されているものであるが、その内、二、三のものを、エンダー宛の書簡を含めて、次に記しておこう。

「汝らはこのような誹謗でもって、神の授けた才能の働きを妨げているのであり、汝ら自身をそれに適わしくないものにしているのである。」[55]「パリサイの悪魔は、私の小冊子と共に、私をきわめて悪どく呪

い、小冊子を焼却に処すと宣告し、私を教会と聖餐式を嘲笑する者だといって、重い悪徳の罰を加え、私が毎日、ブランデーやビールや外国製ワインをたらふく飲むならず者だというのである。しかし、そういうことは全て真実ではなく、むしろ彼の方こそ酔漢なのである。」(Theos. Sendbr. op. cit. S. 536)「首席牧師が靴屋に帰していることは、実は牧師自身のことである。人々は時々酔っぱらってテーブルの下に転んでいる首席牧師を助け上げ、家に連れて帰るのが常なのである」(Schutzrede wider G. Richter, Schiebler Bd. Ⅷ, S. 312)。「酒びたりになっている貴族や権力者たちではなくて、自分たちの浄福を真面目に考えている敬虔で神を恐れる人たちだけが、私を呼び寄せるのである」(op. cit. S.317)。「彼のおこなった誹謗は、私を強め成長させるものであった。彼の加えた迫害を通して、私の小さな真珠は大きくなった。彼がそれを押し出したのであり、また自分で公けにしたのである」(op. cit. S. 319f.)。

ベーメの「小さな真珠」の成育は、一時リヒターの迫害によって妨げられねばならなかった。しかし、この妨害との闘い、困難な試練を通してのみ、「小さな真珠」は却って大きくなり、自分自身を知るようになった。リヒターという、ベーメにとって否定的な力との闘いを介して、彼は自己の内面的神秘思想を成熟させ、その肉づけを、実践的な証しをおこなうことができた。この彼の苦難の生活を知ることによって、我々はベーメが次のように語るその言葉が、単なる無意味な形而上学的思弁の表白ではなく、現実の具体的な生活実感に対応していたということを知ることができるだろう。

「反逆心もまた存在しなければならない。なぜなら、明らかな静寂の意志は無のようであり、何ものも生まないからである。意志は生むべきであるなら、それは有の中にあらねばならぬ、そこにおいて意志は形づくり、物の中で生むのであるから。[56]」「いかなるものも反逆性なしには、それ自身に顕らかにはなりえない。なぜなら、いかなるものも自己に反逆するものを持たないならば、それは常に自己から出発するのみであって、再び自己の内に入るということがない。そこから根源的に発出したものとしての自己の内に再び入るということがなければ、それは自己の根源について何も知らないであろう。もしも自然的生命が反逆性を持たず、目標がないならば、それは自らが由来した自己の根拠を決して問わないであろうし、かくて穏れたる神は自然的生命に知られないままにとどまるであろう。また生の中に反逆性がないならば、そこに感覚も意欲も作用もなく、知性も学問もないであろう。なぜなら、唯一の意志のみを持つものは、何の区別性も持たないからである。ものが運動の衝動へとそれをかき立てる反逆的意志を感じないならば、それは静寂のままであるだろう。[57]」「肯定と否定との内に万物は成り立つ……一者は肯定として純なる力と生命であり、神の真理あるいは神そのものである。これは否定がなければ、自身においては認識不可能であろう」(Theos. Sendbr. S. 597)。ベーメにおいては、「矛盾があらゆる運動と生命性の根である」という命題が、彼の「最初にして最後の知恵」であると評されるが、[58] ベーメのこの知恵は、リヒターとの深刻な闘いによって自己の思想を深めて行った彼の実際の生活に、裏づけられていたのである。

ベーメが家族を残して一人、故郷をあとにしたのは、一六二四年五月十日であった。赴いた土地はドレスデンである。というのは、彼は三月中頃に、この地の宮廷人から招待を受けていたからである (Theos. Sendbr. op. cit. S. 534, 547)。ドレスデン滞在中は、宮廷付の医師で化学者のベネディクト・ヒンケルマンの許に宿をとっている (op. cit. S. 556, 557)。ベーメの理解者であったヒンケルマンは、当地の宮廷の高官たちに彼を引きあわせたが、ベーメは、彼らが五月二六日の聖霊降臨祭の午後、自分の宿を訪れて、「私の話を実に喜んで聞いてく

れた」(op. cit. S. 558) と記している。しばらく後には、大臣ヨアヒム・フォン・ロスが馬車でベーメをドレスデンに近い自分の城へ案内してくれ、「この人もまた私に好意と助力を約束してくれた」「私が自分の才能を伸ばすために糊口の道と安らぎを求めているのを解ってくれようとしている」(op. cit. S. 559) と記している。地方監督エギディウス・シュトラウフも、ベーメの著書を愛読する一人であった(op. cit. S. 556)。シュトラウフはヒンケルマンの許でベーメと話し合ったが、その折、宮廷人たちが集う晩餐会を開きたいとの希望を述べた(op. cit. S. 564)。

このようにベーメ自身はドレスデンの貴族たちに受け容れられ、恵まれた日々を送ることができたが、ゲルリッツに残っている家族たちは、以前と同様まるで見せ物のように愚弄のさらし者であっただけでなく、物理的な身体上の危害まで蒙るほどの目にあわねばならなかった。彼はゲルリッツからの便りで、首席牧師の追随者たちがベーメの家の窓に投石して、家庭の安らぎが破壊される出来事が起こったのを知る。彼の息子エリアスの親方さえもが、けしかけ役にまわったのである。[59]「人々が投石しようという気になれば、それができる」というようなひどい状況のために、「鎧戸を開けることも許されない」(Theos. Sendbr. op. cit. S. 564) 妻に対して、異郷にいるベーメは何の救助の手も差しのべることができなかった。彼はトビアス・コーバー宛の書簡(一六二四年五月二三日付)で、「三週間以内にどうあってもきっと帰宅する」(op. cit. S. 561) ので、それまでひたすら忍耐を続けるよう、妻に伝えてほしいと頼んでいる。この書簡を含めて、前後のコーバー宛の四通のもの(Nr. 61〜64)は、苦境にある妻への配慮の言葉が必ず記されている。

「私の妻に、忍耐して安らかな気持でいるように、落胆せぬようにといって下さい」(五月十五日付)、「私のことは何にも心配はいらない、ただひたすら熱心に祈るようにと、私の妻に伝えて下さい」(同月十八日付)、「お願いです、どうか私の妻と息子によろしくといって下さい、そしてこの手紙を彼らに読ませて下さい。忍耐し祈るように戒めて下さい」(同月二三日付)、「妻はもうあとはんのしばらく忍耐すればよいのです。彼女はゲルリッツでは住む所がないので、私はどこかに住居を手に入れたいと思っています。そうすれば、彼女に安らぎが訪れるでしょう。しかし、どうか今は家に居るように、必要もないのに外出したりせぬようにいって下さい。敵は暴れるにまかせればよいのです。まさか妻を取って食いはしないでしょう」(六月十三日付) ——Theos. Sendbr. op. cit. S. 553, 556, 560, 564.

——帰郷、病い、死、葬儀、墓標——

七月始め、ベーメはいったんゲルリッツの町に帰ったが、そこで間もなく病を得て倒れた。八月半ばのことである。彼は五月にはまだ自分の健康について、「私の身体の状態はまあまあです」と記し(Theos. Sendbr. op. cit. S. 547)、満足の気持を伝えていたのであるが、激しい迫害、家族への心配、宮廷人を相手の数カ月の旅が、急速に彼の健康を害したのであろう。しかし、それでもまだ旅に出る体力を残していたベーメは、十月十五日頃(Jecht, S. 221) 再びシレジア地方を訪れた。恐らく当地のベーメ理解者たちの頼みを断わり切れず、病後の身体にむち打って、人々との対話のために出かけたのではないかと推測される。その数週間後に高熱がベーメを見舞った。フランケンベルクは次のように報告している。「私が旅に出たあとで、彼は高熱に襲われ、水を飲みすぎたために身体が痛々しく腫れた。そしてついにベーメの願いによって、病身のままゲルリッツへ連れ帰られた。[60]」帰宅したのは十一月七日であり、すでに体中むくみがまわり、ひどく衰弱

していた。医師トビアス・コーバーの診断では、水腫症と循環障害であった。

友人でもあったこの医師は、ベーメの最後の日々のことを詳しく書き遺している。それによると、ベーメは臨終の床にふしていても、リヒターの追随者である正統派の牧師たちによって苦しめられ、最後の聖餐式も、憔悴した病人が長い一連の教義上の問いに答えたのち、副牧師エリアス・ディートリッヒによってやっと施された。十一月十六日の土曜日、コーバーの他に、知人のハンス・ローテ、ミカエル・クルツらがベーメの家族と共に病人を見守っていた。彼らがそこでベーメに、喜んで死んで行こうとしているか、と尋ねた時、彼は頷き、神のみこころのままに、と答えた。明くる十七日の真夜中すぎに、ベーメは息子のトビアスを呼び寄せて、美しい音楽がおまえにも聞えるかと尋ねた。息子が否定すると、ベーメは、調べがもっとよく聞えるようにドアを開けてほしい、と頼んだ。その日の夜明け六時頃に、妻と息子たちに別れを告げ、「さあ、私はパラダイスへ行こう」といい残して、実に穏やかにこの世を去ったという。(Jecht, S. 222f. Vgl. Frankenberg, op. cit. S. 21)

翌十八日、コーバーは教会墓地での埋葬と葬いの説教を依頼したが、新しい首席牧師ニコラウス・トマスの拒否に会った。(ベーメ生前の迫害者グレゴリウス・リヒターは、すでに八日十四日に死去していた。) Koyré によれば、ゲルリッツではこれと類似の出来事が一五六〇年に当時の首席牧師ヴィルトワインの下で、一五六七年にはその後継者ミゼニウスの下で起こったという。[61] ニコラウス・トマスがベーメの葬いの説教を拒否したのは、これら先人の例にならったのである。そこで止むなく役所に懇請をおこなわねばならなかった。しかし、ミカエル・クルツが記した最初の懇願文の返事として、ベーメの妻が受け取ったのは、同じく冷い拒否であった。ハンス・ローテの新たな懇請を受けて、やっと十九日の早朝に処置がとられたが、首席牧師は病気を理由にことわり、葬儀に同伴したのは、副牧師であった。しかし、この牧師も葬いの説教を始めるに際しては、役所の依頼を受けたので止むなく義務を果たすにすぎない、自分はむしろここから二十マイル離れた場所にいたい位だと前置きし、ベーメが静かに永眠したという死亡告知文も読むのを省略したという (Jecht, S. 224ff.)。

コーバーの提案でベーメの知人たちが立派な墓を建てたが、けしかけられた群集によって汚され、無残に破壊された。一六七六年には、墓地に特別の墓碑もなく、多くの訪問者たちに場所を示すことができるように墓堀人が置いた石塊があっただけである (Jecht, S. 228)。

――結び、内面的神秘説の実践――

異端者として迫害されたベーメの半生は、このように苛烈で痛ましいものであった。しかし、その苦難に充ちた生涯によってのみ、ベーメは自己の思想の具体的表現と実践的な証しを獲得しえたのである。迫害を蒙る道を歩み、その苦しみに耐ええたからこそ、我性の否定という「過程」を通して内面的に「神性」に到るという自己の神秘思想を貫徹することができたのである。

ベーメの内面的神秘説は、このような実践的「過程」を離れては、正しく把握されることができない。このことを、これまで主に『キリストへの道』に含まれる「超感性的な生について」の一篇と書簡とによって見てきたが、その他の著述からも若干引用して、それを確認しておこうと思う。「どこにおまえは神を求めようとするのか。星辰のかなたの深さの内に求めようとするのか。そこにおまえは神を見出さないであろう。神をおまえの心の中に、おまえの生誕の中に求めなさい。そこにおまえは神を見出すであろう。[62]」「神は我々に非常に近くに

ある、いな我々自身の中にあるのだから、我々が神を求め、そこで神を見出そうと欲するならば、我々はこの世から転換しなければならない。[63]「人間の中には天も地も星も元素も、更に神性の三数も存在する。人間の中に存在しないものは何も名づけられることはできない。[64]」「人間の生は自己を無の中へ与えるならば、自己の欲求を無にするならば、そして光明の炎が訪れてくるならば、もはや何の悩みの炎も燃えることはありえない。[65]」「ところで何も無いところ、そこにこそ静寂の永遠性としての安らぎがあるであろう、そしてこのようなものは決して炎の本質の車輪の中に把えられたり見出されたりしないであろう。[66]」「なぜなら、欲求以前に、欲の外にあるものは自由であり、一つの無である、……存在者がないならば、永遠性があり、それは善である。なぜなら悩みがなく、いかなる変転も持たず、安らぎと永遠の平和があるからである。」「神について、これであるとかあれであるとか、善とか悪とか、自らの内に区別性を持つとかいわれえない。神にはそれ自身において自然なく情緒なく被造物もない。[68]」「さて、自らの内に存在者なく静寂であるものは、自らの内に何の闇も持たず、存在者なき静かな透明な、光明の歓喜であり、それは何ものもなき永遠性であり、あらゆる他の神以前に呼ばれる。[69]」「人が神的根拠、神的顕示を探究しようと欲するならば、彼は予め次のことを熟考しなければならない。いったい何のために彼はこのようなものを知ろうと欲するのか、彼が達成したがっているものを実践し、神の栄光と彼の隣人の幸福をはかろうと欲するのか、そしてそのことによって地上性と我意において死ぬこと、彼が求め欲しているものの中に生き、神と一つの霊になることを欲するのかと。[70]」

ベーメは魂の内奥の「神性」に到り、これと合一することは、自己を「無」と化すこと、「地上性と我意において死ぬこと」と不可分であるというのである。『キリストへの道』の表現では、「自己を十字架に懸け」「世と自己の生命を捨てねばならぬ」[71]という「過程」が、自己の神秘思想の核心に存することを説くのである。しかも、彼はこのような内面的神秘説を語ると同時に、厳しい無私、捨身の道を実際の生活の中で可能な限り辿ろうとしたのである。すでに見てきたように、彼は自己の使命を全うするために、平穏で比較的豊かな靴業生活を放棄し、妻をさえ哀れな行商婦に転落せしめた糸商、手袋商の貧苦の道を歩んだのであった。ベーメは決してもともと貧しい靴屋であったのではない。恵まれた靴匠から貧者の行商人に自らなったのであり、捨てることを実践したのである。加えて牧師たちからの誹謗、身体的加害の苦痛も、自分だけでなく妻子をも巻きぞえにして、受けなければならなかった。

無論、これだけで自己の「過程」が成就されたとは、ベーメは決して考えなかったであろう。無私、捨身の道を志す人に向って、その道はいかに歩んでも果てしなく、あなたは前進せんと努めれば努めるほど、かえって遠去かって行くのを思い知って「ぞっと」するでしょう、とドストエフスキーが作品中の高僧（『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老）に語らせているが、[72]恐らくベーメも同じ思いを痛切に味わったにちがいないであろう。この悲しい思いは、誠実に己れを知る者なら、終生免れることのできない痛苦なのであるから。死を目前にして「さあ、私はパラダイスへ行こう」ともらしたベーメは、今こそこの痛苦から解放され、我性を完全に無化しうるのだという喜びに浸っていたのかも知れない。

このように、死を迎えるまで不完全の域を出ないとはいえ、しかしそれでもベーメが「キリスト教的な死の演習」[73]に熱心に励んだという A. Peip の意見を、我々は認めなければならない。ベーメはこの実践的努力を離れた、単に思弁的な神秘的直観のようなものを説いたのでもなければ、自己否定について、行為に支えられぬ空疎な言葉を軽々

しく弄したのでもない。苦難の半生が物語るように、彼の内面的神秘思想は、生活の場での真剣な努力によって裏打され、不十分ながら身証されていたからこそ、いつまでも人々の心を打つことができるのである。ドイツ神秘説における「神性への道」は「我々自身の内への深化」であるといわれるが、[24] ベーメにおいては内への深化は静かな僧院や安らかな別邸での思弁的瞑想ではなかった。彼の内的深化は、世俗的貧窮と理不尽な迫害の汚辱を蒙りつつ、この困難な現実の生活の渦中で試みられたのである。(了)

註

(1) 前稿のはじめに述べたように、ベーメの思想が内面的神秘主義の規定によってだけでは十分にいい尽されないのは無論である。Wehr もこのことに関して、ベーメの神智学の内容を、もっぱら内面的魂の事象の投射という観点で見ないように用心すべきだといっている。(Gerhard Wehr, Jakob Böhme, Rowohlt, 1971. S. 18)。しかし、この小論は、前稿と同様、ベーメの思想の全貌を解明しようという意図を持つものではなく、彼の生涯の跡を辿ることによって照明され、その生活によって身証されてくる内面的神秘主義の契機のみを摘出しようとするものである。

(2) 死去したのは一六二四年十一月十七日であるが、生誕は一五七五年で詳しい月日の記録がなく不明確なので、ひとまずフランケンベルクの報告に従って五十才とした。(Abraham von Frankenberg, Gründlicher und wahrhafter Bericht von dem Leben und Abschied des in Gott selig-ruhenden Jacob Böhmes, S. 23.)

(3) Paul Deussen, Jakob Böhme, Über sein Leben und seine Philosophie, 2. Aufl. Leipzig, 1911, S. 15f.

(4) Richard Jecht, Die Lebensumstände Jacob Böhmes, Neues Lausitzisches Magazin, Band 100, Görlitz, 1924, S. 208.(文中、Jecht とあるのはこれを指す)

(5) Jakob Böhme, Theosophische Sendbriefe, Schiebler Bd. VII, S. 393.

(6) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 401.

(7) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 396.

(8) A. v. Frankenberg, op. cit. S. 12.

(9) Hans Grunsky, Jacob Böhme, Stuttgart, 1965, S. 35.

(10) J. Böhme, Schriftliche Verantwortung an E. Ehrbaren Rath zu Görlitz, Schiebler Bd. VII, S. 325.

(11) J. Böhme, Aurora oder Morgenröte im Aufgang, Schiebler Bd. II, S. 205.

(12) Alexandre Koyré, La Philosophie de Jacob Boehme, Paris, 1929, p. XV. ここでいう小文集とは『キリストへの道』Der Weg zu Christo を指している。

(13) A. Koyré op. cit. p. X.

(14) エルンスト・ベンツ、酒井修訳、「シェリング神学思想の父祖たち」、『哲学研究』、四五五号、二五頁。

(15) Windelband, Geschichte der neueren Philosophie I, Leipzig, 1922. S. 115.

(16) G. W. F. Hegel, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie 3, Sämtliche Werke hrsg. von H. Glockner, Stuttgart, 1959, Bd. 19, S. 297.

(17) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 463.

(18) J. Böhme, Schutzrede wider Gregor. Richter, Schiebler Bd. VII, S. 319.

(19) A. v. Frankenberg, op. cit. S. 13.

(20) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 368.

(21) H. Grunsky, op. cit. S. 40.

(22) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 390.

(23) J. Böhme, Erklärung unterschiedlicher theils eigener, theils Paracelsischer Wörter, Schiebler Bd. VI, S. 689.
(24) J. Böhme, Aurora od. Morgenröte im Aufgang, op. cit. S. 17.
(25) J. Böhme, Aurora, op. cit. S. 256.
(26) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 462.
(27) J. Böhme, Schriftliche Verantwortung an E. Ehrbaren Rath zu Görlitz, op. cit. S. 325.
(28) J. Böhme, Aurora, op. cit. S. 290.
(29) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 390.
(30) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 401.
(31) J. Böhme, Die drei Principien göttlichen Wesens, Schiebler Bd. III, S. 7.
(32) A. Koyré, op. cit. p. 38.
(33) J. Böhme, Theos, Sendbr. op. cit. S. 397.
(34) Gertrud Bruneder, Das Wesen der menschlichen Freiheit bei Schelling und sein ideengeschichtlicher Zusammenhang mit Jakob Böhmes Lehre von Ungrund, in : Archiv für Philosophie, hrsg. von Jürgen V. Kempski, 8/1, 2, Juni 1958, W. Kohlhammer Verl. S. 103.
(35) J. Böhme, Von der Menschenwerdung Jesu Christi, Schiebler Bd. VI, S. 163.
(36) J. Böhme, Von der Menschenwerdnng, op. cit. S. 245.
(37) Hans=Georg Jungheinrich, Das Seinsproblem bei Jakob Böhme, 1940, Hamburg, S. 23.
(38) G. Bruneder, op. cit. S. 103.
(39) J. Böhme, Von sechs theosophischen Punkten, Schiebler Bd. VI, S. 335.
(40) 拙論、ベーメの「無底」についての一考察、関西倫理学会編『倫理学研究』第一集（至誠堂書店、昭和四六年四月）
(41) J. Böhme, Theos, Sendbr. op. cit. S. 370.
(42) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 445.
(43) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 568.
(44) J. Böhme, Theos. Sendbr. op. cit. S. 535.
(45) J. Böhme, Theos, Sendbr. op. cit. S. 370.
(46) J. Böhme, Theos, Sendbr. Peuckert Bd. 9. S. 261.
(47) A. Koyré, op. cit. p. 53.
(48) A. Koyré, op. cit. p. XV.
(49) A. Koyré, op. cit. p. 54.
(50) A. v. Frankenberg, op. cit. S. 20.
(51) H. Grunsky, op. cit. S. 45.
(52) J. Böhme, Schriftliche Verantwortung an E. Ehrbaren Rath zu Görlitz, op. cit. S. 326.
(53) Das gehegete Gericht Gregorii Richter's, Schiebler Bd. VII, S. 291.
(54) H. Grunsky, op. cit. S. 59.
(55) J. Böhme, Schutzrede wider G. Richter, op. cit. S. 300.
(56) J. Böhme, Vom dreifachen Leben des Menschen, Schiebler Bd. IV, S. 12.
(57) J. Böhme, Die hochtheure Pforte von göttlicher Beschaulichkeit, Schiebler Bd. VI, S. 454f.
(58) Paul Hankamer, Jakob Böhme, Gestalt und Gestaltung, 2. Aufl., Hildesheim, 1960, S. 285.
(59) G. Wehr, op. cit. S. 43.
(60) A. v. Frankenberg, op. cit. S. 21.
(61) A. Koyré, op. cit. p. 3—4.
(62) J. Böhme, Die drei Principien göttlichen Wesens, op. cit. S. 25.
(63) J. Böhme, Vom dreifachen Leben des Menschen, op. cit. S. 68.
(64) J. Böhme, Vom dreifachen Leben des Menschen, op. cit. S. 92.

(65) J. Böhme, Eine kurze Erklärung nachfolgender sechs mystischen Punkte, Schiebler Bd. VI, S. 401.

(66) J. Böhme, Vom dreifachen Leben des Menschen, op. cit. S. 49.

(67) J. Böhme, Vierzig Fragen von der Seele, Schiebler Bd. VI, S. 7.

(68) J. Böhme, Von der Gnadenwahl, Schiebler Bd. IV, S. 467.

(69) J. Böhme, Vom dreifachen Leben des Menschen, op. cit. S. 29.

(70) J. Böhme, Schlüssel, Schiebler Bd. VI, S. 659.

(71) J. Böhme, Der Weg zu Christo, op. cit. S. 131.

(72) Ф. М. Достоевский, Братья Карамазовы, Том I, Париж, 1954, стр. 77.

(73) Albert Peip, Jakob Böhme, Leipzig, 1860, S. 7.

(74) Kuno Fischer, Geschichte der neueren Philosophie, Bd. I, S. 96.